耳鳴りが集中力を削いだ。作業は中止だ。好きな時にはじめて、好きな時に終る、それが、日曜日の特権だ。時計の針は1時を廻っている。日曜日の朝が終った。手が汗ばんでいる。脈搏は、1分間に、82だ。唇が渇き、口のなかの唾液が粘々している。頭の芯があつく、肩や首の筋肉が硬くなっている。

X氏は、雨傘をさして、赤い髪の女がいる店にむかって歩きはじめた。駅前の広場にはスーパーマーケットがあって、買いもの客の女たちが雨に倦んだぼんやりした顔を並べていた。

昼間から酒を呑む。生酒しか呑まない。赤い髪の女は、X氏の注文する料理の内容まで空で覚えている。日曜日まで働く仕事は辛いだろう。女は、規則的に、メニューを差しだして、なににしますかといつもの声の高さで同じ文句を繰りかえすのだった。それが彼女の仕事だ。声は、少し嗄れていて、張りがなく、疲労を含んでいる。表情が少ない。X氏は、耳に馴染んだ女の声の調子にホッとして、一応、差しだされたメニューを眺める振りをして、アスパラガス、冷奴、蛸の刺身、生酒2本に、ポテトサラダと答える。

黙って生酒をのむ。不意に、1人の殺人者の顔がX氏の脳裡を掠めた。もう、何年も昔の話だが、どうして、その殺人者の顔が、今、X氏の記憶のなかから立ちあがってきたのか、わからない。このような記憶の働きには、何か、意味でもあるのだろうか。X氏は、女の顔を注視する。小さな工場を経営する中年の男の顔も見える。若い女と中年の男が、男の実の娘を殺すという事件だ

った。頭の禿げた、小肥りの、背の低い男が、臨時の手伝いに来ていた独身の若い女と2人で、自分の幼い娘を殺して、コンクリートに死体を混ぜて固めてしまい、自宅の床の下に埋めたという事件だった。若い女は、舞踊の名取りで、美女と呼んでもいい顔立ちをしていた。娘が殺された時、男の妻は、亭主の浮気を知って、腹を立て、実家に帰って、不在だった。殺人者たちは、娘が邪魔になったと語っていた。X氏は、その言葉に赤鉛筆で線をひいたはずだ。いらなくなってしまった人間、ノオトの余白には、そう記した。

X氏は、赤い髪の女が、殺人者となってしまった舞踊家の女に似ていると思う。おそらく、横顔だけでなく、声まで酷似しているのだろうと考えてしまう。もちろん、殺人者の女の、実際の声は、聞いたこともないし、店で額に汗して働いている赤い髪の女にとっては、殺人者に似ていると思われるだけでも、迷惑な話かもしれない。X氏は、ただ、そう思っているだけだ。声に出したこともない。赤い髪の女は、何も知らない。X氏の空想にすぎぬ。いや、単なる空想にしては、そのことが生き生きとしたリアリティをX氏に感じさせ、ひとつの現象となってしまっていることに問題があるのだ。頭の中の声も、また、もうひとつの現実にちがいはないのだ。声たちは、境界線を破ってしまう。ひとつの身体にひとつの声があるという事実を無視してしまって、方々に流れだすのだ。水があらゆるものを運ぶように、無数の声がX氏の耳に流れ込み、侵入し、頭のなかでふつふつと泡立ち、混沌を形成する。